

七拾目 下  
 六拾五匁  
 六拾目  
 一、七拾五匁 上 さうり取

七拾目 中  
 六拾五匁  
 六拾目  
 五拾五匁  
 五拾目  
 四拾五匁 下  
 四拾目  
 三拾五匁

一、右家中若黨・小者さうり取給銀、如此召遣置べく候。他國に立歸之供に召連候はゞ、江戸に五匁、京都に三匁、其外道中遠近に隨ひ少宛路銀可遣之。令逗留者、路銀之外増銀十匁宛遣之、不可及路銀事。付り、一年切のもの召遣日限より、三十日切給銀可相渡事。  
 一、取逃并致曲事令欠落者は、妻子請人にかゝり可申候。

其外之走人、奉行人に相斷、指圖次第請人手前穿鑿いたすべく事。

一、人づかひあしき主人に奉公仕儀、迷惑之由斷候ものあまた於有之は、奉行人より奉公人不可及相渡事。

一、一年切之奉公人、曲事有之、せいばい仕者奉行所へ斷可申付候。若至當座成敗申付候者、其科之子細急度奉行所へ相斷、則奉行方より可言上事。

右奉公人、郡奉行より奉行人の謝取、上中下令吟味、給銀上中下書出主人に可相渡者也。

寛永十八年二月七日

定 小々姓相抱候下々給銀之事

一、百四拾目 上 かつ、若黨  
 百三拾目 中  
 百二拾目 下  
 一、百五匁 上 小者  
 百 目  
 九拾五匁

九拾目 中

八拾五匁

八拾目 下

七拾五匁

七拾目

六拾五匁

一、八拾目 上 さうり取

七拾五匁

七拾目 中

六拾五匁

六拾目

五拾五匁

五拾目 下

四拾五匁

四拾目

一、右若黨・小者さうり取給銀如此遣、是よりすゑ御文言年號月日同前。

二八年貢未進之方に百姓

召仕候儀御定

覺

一、諸給人從知行所、未進之方に爲<sup>(世)</sup>普代從前々召置候小者さうり取之事、百姓を普代に召置候儀者有之間敷候條、未進高應年數被相極、其限召仕候ば、暇を遣候様に可被申觸事。

一、從知行所年記に召置候小者、草履取斷、右同前之事。

一、從百姓方納得候て、先主人に奉公可仕と申者之儀は、各別之事。

一、御隠居様・淡路守様・飛騨守様御領分、從先知召置候者、先可被吟味候。勿論筑前守様御領分明知分可爲同前候。但、金澤衆居成之給人知より召置候下々之儀は、唯今不及穿鑿事。

一、在々百姓之外あたまふり、何も郡奉行中より相改、奉公人に可仕候。付り、在郷奉公人其村々可入程之人數致吟味、其外は御家中可爲奉公人事。

一、萬一奉公人々數不足候者、在々百姓之内、當耕作不仕